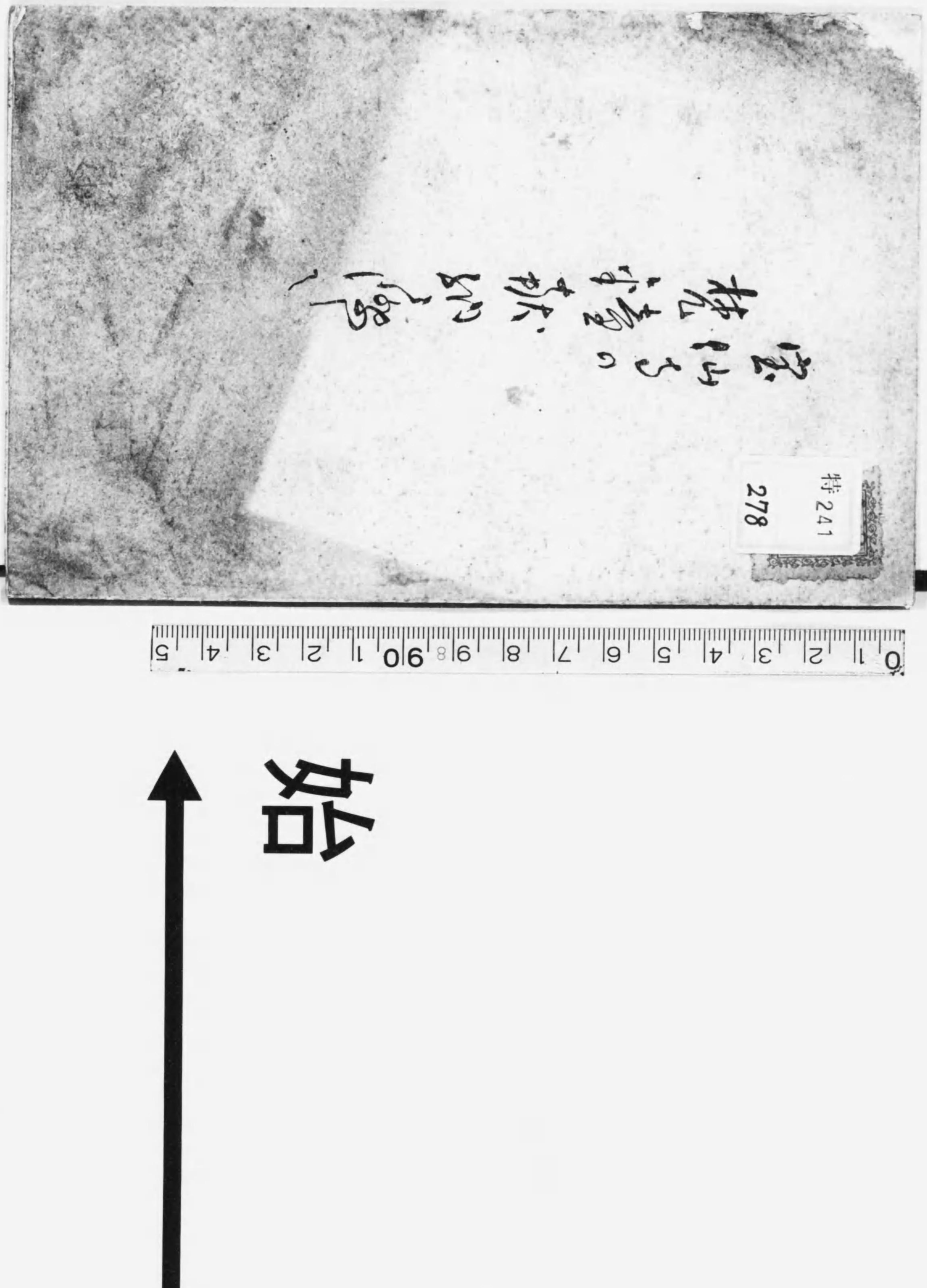
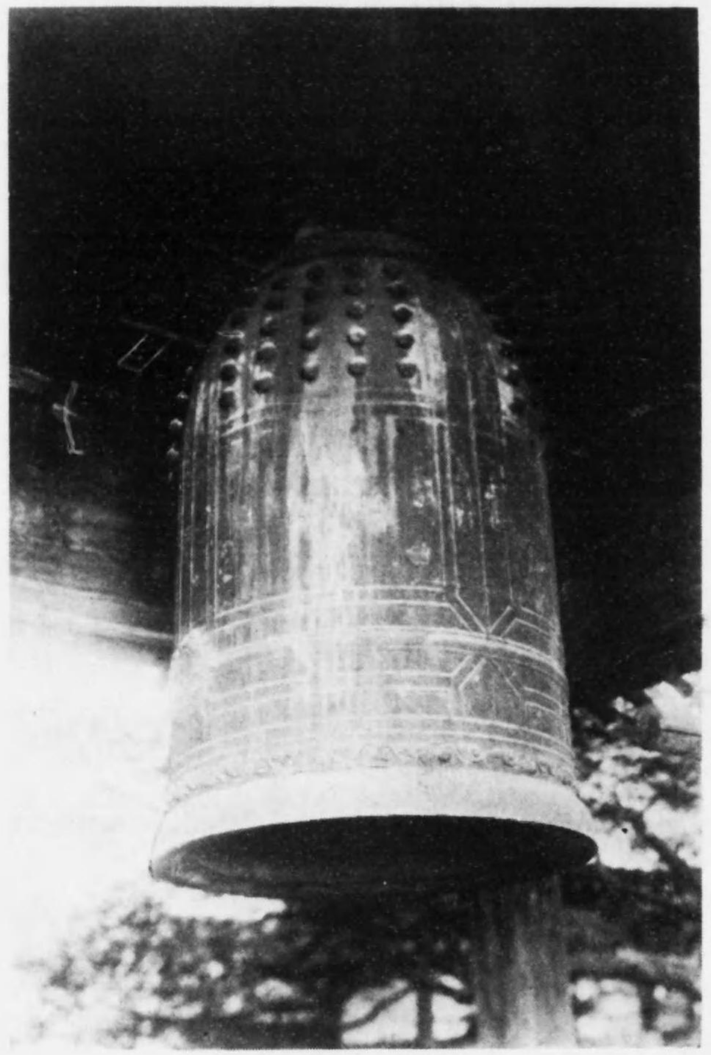


特241
278

特241
278



宝仙寺梵鐘

室仙寺梵鐘献納に際して

室仙寺第五十世　富田戮純

一

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、とは、平家物語の卷頭の言である、寺院と鐘は附物である、大寺には大鐘あり小寺には小鐘がある、此の大鐘を常には梵鐘と呼び、小鐘を半鐘と呼んで居る、梵鐘にも大小の差があつて我が大日本帝國で一番大きい鐘は國家安康の文字があるとて、家康がケチを附けた京都大佛即ち方廣寺の梵鐘で、二萬二千貫ある、見た所では京都智恩院の梵鐘の方が大きいが重量は一萬八千貫である、大阪天王寺の鑄損した梵鐘に四萬二千貫の大鐘があつたが、既に其筋へ献納せられたのであるから、今は彈丸となつて何處かを打破つて居ることであらう。

二

大東亞戰爭も愈々長期戰となつたので、其筋ではお寺の梵鐘を第一に差出して貰ひたいとのことである、襖の引手も蚊帳の釣手も差出して貰ひたいのであるが、引手や釣手の重量で、十貫と集め

るには容易でない、然るに梵鐘ならば小型のものでも百貫以上ある、大型になると前に書いたやうな何萬貫と云ふ雄物がある、そこで大東亞戰爭で第一に不足する銅の含有量の多い梵鐘が犧牲の壇に昇つたのである。

三

我が宝仙寺では既に金屬の献納又は供出を四回實行して居る、第一回目は新義眞言宗豊山派で不用品の献納を開始せられたので、我が宝仙寺でも、壞れた燈籠、金蓮花、花鉢、花瓶、香爐等を差出した、之を陸軍省に献納に行つた、所が、今金屬を直に請取る設備がない、暫時の間待つてくれとの事であつた、併し、集めた宗務所では廊下も會議室も控所も、香爐や蠟燭立や半鐘で一杯である、止むを得ず古道具屋に之を賣拂つて、代金を献納した、夫でも其の當時は之を非難する人すらなかつた。

第二回目は戰時物資活用協會が出來て、愈々金屬回收も本格的となつたので、十五年十一月廿六日に天水桶五ケを始め燈籠、佛具等二十六點で五百九十六貫を献納した、此等の天水桶を全部寫眞に撮つて置く積りであつた、所が戰時物資活用協會へ通知したらば其の翌日直に請取に來た、而も夫が私の留守中であつたので、何等の記錄すらせずに持ち去られた、惜いことをしたと思つた、然る

429
30

に翌年の春になると献納品の山積にせられたニュース映畫が中野館にも出た、其の中に宝仙寺の天水桶があつた、其の時寺の一人が丁度見物に行つて居つたので思はず「内のゝだ」と大聲に叫んだとのことであつた、其の夏六月、物資活用協會から金屬献納運動概要と云ふ宣傳ビラが各寺院に配布された、所が其の宣傳ビラの中に宝仙寺本堂前の天水桶其儘のものが横に成つて出て居るのみか、大師堂前の赤坂區日護摩講の寄附した天水桶は「赤」と云ふ字と「日護」の二字が明瞭に顯れて居る、此の宣傳ビラの中で献納品で文字が明瞭に讀めるのはたつた是れ一つである、此の日護摩講の天水桶は日護摩講三千人の信仰の結晶品であつたのであるが、私は特にお別れの護摩すら修行せずにアツサリ献納してしまつたのである、何となく執念深く付纏はるゝやうな氣がした、そこで誠に相濟まなかつたと、生てる人に物云ふ如く恭しく頭を下げて詫びた。

第三回目は本春三月六日で町會から集めに來たので、現在使用品で直に代用品の購入し得るものは全部献納した、計二百六十三貫で代價を附すれば金四百六十何圓とかになると云ふことであつた、其の中に宝仙寺が雨乞の時に蛇骨を浮べる金盥が二箇あつた、此の金盥の中に水を入れて蛇骨を放すと、不思議なことには水が血の色と少しも變らぬ色になる、私が大正三年八月十日結願で雨乞の祈禱した時も、矢張金盥の水は血の池と變じ、結願の夜大風雨であつた、こんな由緒ある品である

から献納を見合せやうと思つたが、恐らく今後に雨乞の祈禱をするやうなことはあるまい、さうなると全くの死藏品になる、寧ろ此の靈物が敵に當つて大破壞をせよと祈りつゝ差出してしまつた、こんな譯であるから、記念に送られた花瓶も床飾も皆献納してしまつた。

四

されど殘されたものは梵鐘である、私は第一に梵鐘を献納しやうと思つたこともあつた、夫は支那事變の勃發した當時、必ず此の戰は長期戰となると思つたので、昭和十二年九月に不動明王慈救眞言一億返國禱會を發願すると同時に、私自身の衣服並に調度品は足袋と手拭を除くの外一切購入せぬと發表した位である、何日は梵鐘献納と云ふ時が來るのではないかとの豫感がした、併し空襲になつた場合、ラジオが役立たぬ時は警報は梵鐘に依るの外はない、そうなると梵鐘を濫りに早まつて鑄潰すには及ぶまいと、遂に今日まで差控えたのである、併し此の度は愈々梵鐘ともお別れせねばならぬ。

五

元來、梵鐘なるものは宗教用具の最大感化力を持つて居るものである、佛教の寺院にも基督教の教會にも皆鐘はある、

花の雲鐘は上野か淺草か

と芭蕉翁は吟じて居るが、春の麗かなる時に聞く鐘は非常に優美なもので、秋の夜に聞く鐘の靜寂は人を醒す趣がある

月落烏啼霜滿天　江風漁火對秋眠
胡蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

唐の張繼の詩は誰も知つて居る、或る人が鐘の音を研究した書物に、春の夕暮に、京都の智恩院の鐘を黒谷に聽くのは如何なる大交響樂の妙音よりも高尚で幽雅であると書いてあつた、朝の鐘の音を聞く時、人世の希望が躍動すると云ふ人もあるが、一日の農事を終つて鍬を肩にしながら家に歸る途上に山寺の撞く鐘の音は一日の最大慰安の聲で、何物よりも嬉しいとは、能く聞く話である、吾々都會人でも、一日活動していざ家路につかんと省線に乘つた時、ボーンと一聲聞ゆると、云ふに云はれぬ慰めを得るのである。

六

佛教寺院が梵鐘を鳴し始めたのは何時頃か知らぬが、我が宝仙寺で毎朝上堂の前に僧侶が庫裡に雙んで唱ふる露地偈と云ふのがある、

降伏魔力怨、除結盡無餘、露地擊犍椎、比丘聞當集
諸欲聞法人、度流生死海、聞此妙響音、盡當雲集此

此の偈の意は、魔物を降伏し、結即ち煩惱を除いて盡く餘すなくせよ、外庭で、犍椎 Ghanta 即ち、梵鐘を擊つ、比丘（僧侶）が之を聞いたならば集れ、また諸の說法を聞き生死を解脫しやうと志すものは、此の妙響音を聞いて盡く此の所に集れと云ふのである、此の犍椎は庭に釣された鐘即ち釣鐘である、此が寺內は勿論、村里まで聞ゆるのであるから、相當に大鐘であることは想像される、この露地偈は既に增一阿含經卷二十四に出て居つて、阿難尊者が大聖釋尊の說法を聞き終つて、歡喜踊躍し、ジツとして居れず、自ら講堂に昇つて犍椎を擊ち弟子に皆集れと報じた時の偈だと書いてあるから、鐘を擊つて集合を促したことは既に大聖釋尊在世からあつたものと見てよい

七

併し其の始は云ふまでもなく實用品であつて莊飾品ではない、僧侶の集合、退散、又は起臥飯食等の報知機であつた、丁度夫は後世の陣鐘のやうなものであつた、所が此の鐘が敎化用となるに至て、おのづから大型となつたのである

元來、寺即ち僧伽藍 Sam Gharama は衆園と翻譯せられて、僧侶が五百人以上も居つたものである、所が此の伽藍のあるべき所は阿蘭若 Aranya で大牛の遠吠も聞えぬ位の所に、建つべきだとせられて居る、此の如く村里から距つた所にある寺院が、信者に鐘の音を聞かせるには相當の大鐘でなくてはならぬ、此の意味から見ても、大聖釋尊滅後約三百年の阿育王時代には、相當に大鐘があつたと推定して差支ないと思ふ、印度に古鐘の存在するか否かは知らぬが、支那及び朝鮮には唐時代のものがある、我國の現存品では文武天皇二年（紀元一三五八）の銘のある、京都妙心寺の梵鐘は黃鐘調の最古の品で、次が奈良興福寺の神亀四年（紀元一三八七）、越前國織田神社の神護景雲四年（紀元一四三〇）が奈良朝のものだと云ふことである、平安朝の鐘では京都高雄山神護寺の三絕鐘が最も著名で平安朝の鐘は現存品が十一口あるとのことである、三絕鐘とは發願者が和氣彛範で、撰文が菅原是善、筆者が藤原敏行で、共に當時の第一流の人であつたからである、數へて見れば我が國の最古の品は約一千二百五十年前のものである。

八

鐘の功德と云ふやうなことは改めて云ふまでもない、既に前揭の增一阿含經に鐘の音を聞いて煩惱の夢を醒すことが出て居る如く、其の後に此の思想が擴大されて、地獄に墮ちた衆生が鐘の音を聞いて、八寒八熱の苦を免れたと云ふ、因緣話も澤山ある、梵鐘には

一聽鐘聲　當願衆々　斷三界苦　得見菩提

の偈を刻することゝなり、吾々僧侶が朝鐘を撞く時は

洪鐘晨響覺群生　聲遍十方無量土
含識群生普聞知　拔除有情長夜苦

と唱ふるのである、其の意味は晨に洪鐘を撞いて一切の生物を醒す、其の聲は十方の無量の國土に遍く響き、一切の生物は此の聲を聞いて、長い生死海の闇の苦を除け、とのことである。

九

我が宝仙寺の梵鐘は現存品より、前に、既に一の梵鐘があつた、夫は三重塔の建立を發願した第十三世賢海法印の時

鐘樓立、椎鐘一口　新鑄立、

と宝仙寺法流相承記（是は各世代か直筆又は弟子等が記したもので根本史料）にある、此の賢海は元和八年に宝仙寺第十三世を繼ぎ、慶安元年に入寂して居る、恐らく寛永年間に梵鐘が鑄造せられたのであらう、此の梵鐘は何時亡つたか、或は小型で物足らなかつたか、第二十三世俊興法印の時武井重三郎の母、清光院の寄附で、一世に時めく牧野成貞の奥方の助勢もあつて貞享四年十二月二

十八日、今の梵鐘、經二尺七寸、高さ五尺の大鐘に鑄直られたのである、其の鐘銘は

夫鐘響者、如來聲教、法器最上也、故、佛閣有則不可無梵鐘矣、于爰、武州多摩郡中野鄉、明王山聖無動院寶仙寺者、眞言瑜伽道場、東關無雙舊地也、故、雖尊容溢堂禪客滿座、犍槌未成矣、佛場樞要非闕乎、雖當院累代嘆之、予亦同悲情兮、無陶鎔鑛銅之力、幸有武井重三郎尉慈母、訴牧野氏源朝臣成貞公家室、家室、深誓於國家安全、益願於家門繁榮、即新鑄冶二尺七寸鴻鐘、庶幾、因此功、檀女至願頓滿焉

銘曰

偉矣神鐘響、一撞動大千、朝驚三界夢、夕等四生偏、範圍爲形也、內空闊外圓、
人心從物表、懇鑄此因緣、檀女捨財淨、子孫長得全

貞享四丁卯歲十二月廿八日

明王山第廿三世法印　俊興記
助緣列衆正藏院法印　俊義
洞家碩師宦峯

武井氏老母清光院尼公　冶工　田中丹波守藤原重行作

とある、此の鐘銘が、豊多摩郡誌や中野町誌には寫誤の爲に誤字や倒置が多くて、全く意味が不通となつて居るは遺憾である。之を假名交りに書き改むると

夫れ鐘の響は、如來の教聲にして法器の最上なり、故に佛閣有れば梵鐘なかるべからず、爰に武州多摩郡中野郷明王山聖無動院寶仙寺は、眞言瑜伽の道場にして東關無雙の舊地なり、尊容堂に溢れ禪客座に滿つと雖も、犍槌（梵鐘の梵名）未だ成らず、佛場の樞要を闕くに非らずや、當院累代之を嘆き、予も亦同じく悲情す、陶鎔鑛銅の力なし、幸に武井重三郎尉の慈母あり、牧野氏源の朝臣成貞公の家室に訴ふ、家室は深く國家安全を誓ひ、益々家門繁榮を願ふ、即ち新に二尺七寸の鴻鐘を鑄冶す、庶幾くは此の功に因つて、檀女の至願頓ちに滿たんことを

銘に曰く

偉なるかな神鐘の響、一たび撞けば大千（世界）を動す、朝に三界の夢を驚かし、夕に四生の偏（道）を等ふす、範圍の形たるや、內は空闊にして外は圓なり、人心は物に從つて表はす、懇禱す、檀女（女の檀那）淨財を捨てたる此の因緣によつて、子孫長く全きを得んとなるのである、此の鐘銘は千、偏、圓、緣、全の五字は一先の韻字であるから、文字の使用に無理のやうな所があるが、韻字の關係で止むを得ぬ。

十

此の梵鐘の竣工は鐘銘の示すが如く貞享四年で、翌五年が即ち元祿元年である、然れば此の鐘は謂ゆる元祿の盛時の產物である、此の梵鐘の關係者たる牧野備後守成貞は五代將軍綱吉の寵遇に依つて二千石から八萬石まで出世した御老中で、柳澤吉保に繼ぐ元祿時代の大立物である、此の牧野備後守の奧方を動した人は武井重三郎の母堂淸光院である、併し此の淸光院は如何なる人であるか更に解らない、當寺の住職の第二十三世俊與は宝仙寺法流相承記に依れば、常陸國信太郡岩田郷飯田隼人の子で、江戸の愛宕下圓福寺俊宥の弟子となり、下野國出流山千手院から當寺に貞享四年十一月二十五日に晉山し、牧野備後守成貞の歸依に依て殿堂等を修理し、三ケ年住職して四ケ役寺の本所彌勒寺に榮轉したのである、然れば梵鐘の銘の享保四年十二月二十八日から見ると、僅かに一ケ月ほど前に當寺に住職したのである、であるから俊與は其の當時の住職ではあつたが、此の梵鐘の發願人は恐らく前住の第二十二世賴譽であつたらしい、賴譽と云ふ人は、此の鐘の竣工より約二年前に、宝仙寺で灌頂を修行した、其の時に入壇者が一千餘人あつたと云ふから、相當の感化力に富んで居つた仁と見て差支ない。

また、助緣列衆正藏院法印俊義とある、此の梵鐘の鑄造を助力した人であつて、今の神明町正藏

院住職で、名から推すと或は俊興の弟子であつたかも知れぬ。

十一

扨て我が宝仙寺の梵鐘は如何なる用途に供せられたか、時の鐘、送迎の鐘、報知の鐘、無常の鐘火急の鐘、儀式の鐘と大別することが出來ると思ふ。

時の鐘は明け六つ(午前六時)、暮れ六つ(午後六時)、九つ(正午)の三度の時報をしたものである、私の宝仙寺に來た時は、朝の鐘を眞暗の中に撞いたものである。

送迎の鐘、是れは大賓の送迎に用ゐたものである、例せば徳川將軍が宝仙寺に御成りなるとすれば、淀橋の橋の邊に御越になつた時分に、御迎の鐘をボーンと撞く、お行列がエエーヤと掛聲をする、其の間にボーンと響くのは音樂的である、私は曾て越後國正法寺に權田大僧正の所に、六金剛と共に受法に行つたことがある、其の歸路に正法寺の大門を開いて吾々を送り出し、送りの鐘を撞かれたが、實に懐しいものであつた、今でも其の鐘の音が耳の底に殘つて居る。

報知の鐘は云ふまでもなく、緣日とか說教とかの際に之を知らせる爲に撞く、宝仙寺でも施餓鬼會、土砂加持會、毎月の二日、十二日、廿一日の緣日等を知らせる爲に撞く、其昔宝仙寺第三十六世祐嚴法印の天明時代には春の四月廿日、廿一日、廿二日、秋の九月一日、二日、三日の兩土砂加

持には、中野は云ふに及ばず、今の杉並、淀橋兩區の信徒が毎日〳〵三千人以上も集つて此の鐘を撞いたのである。

無常の鐘は、死亡の通知を請取つた時に三つだけ撞く、此の鐘を聞いた時は僧侶は直に合掌して冥福を祈るのである。

火急の鐘は、亂打で、火事とか洪水とか今日ならば空襲とか云ふ時に撞くのである。

儀式の鐘は、我が眞言密敎の大法會の時に神降(コウロス)鐘がある、諸天善神の來臨影向を請ふ鐘である、今春三月廿八日、興敎大師八百年忌と護國英靈の追悼を嚴修した時も此の神降鐘を撞いた、また去る十月六日、中野區出身護國英靈追弔法要にも、世界に響き渡れと此の神降を撞いた、此の外上堂下堂等の進退を鐘で指揮することがある、除夜の鐘の百八聲とか、祝禱日の二十一聲とか、此の種のものは數えれば澤山あるが、今は略して置く、此の意味から見れば、鐘は莊嚴品ではなく、全く寺院の實用品で、なくてはならぬものである。

十二

我が宝仙寺の梵鐘は大鐘ではないが、兎に角元祿時代のもので、一世に時めく牧野備後守の後押で出來たものとすれば、相當に由緒のあるものである、特に優秀の作品ではないが、決して駄物で

はない、當時の製作としては先づ優秀の部である、殊には中野鄕と云ふものと考へ合せるとき、鄕土史料としても重要な遺物と言はねばならぬ、豊多摩郡誌や武藏野歴史地理等にこの重要性を認むればこそ、この梵鐘の記事を掲載してゐるのである。更に言ふならば、この東京府下に元祿以前の梵鐘が果して幾口あるかと云ふ事である、他の遺物でも東京市内にも千年二千年の古物の尊いものがあらう、しかし乍ら製生の當初からあつたのでなく、移建されたり、流轉して來たものである、これからすれば移し換えられた國寳よりは、美術的價値が少くとも、中野と云ふ鄕土そのものにとつては、重要な資料、言ひ換へれば中野そのものゝ重要寳物ではないか、是れを献納すると云ふことは何となく心殘がある、さりながら、我が大日本帝國が興廢の岐れ目に當つて、吾々は滅私奉公せねばならぬ。

十三

第一次世界戰爭の時にも、相當に國家觀念に變革があつた、米國大統領の提唱した民族自決主義の如きは從來にない新説である、併し第一次世界戰爭の際は中立國も相當に多かつたので、國際公法が嚴然として存在した、故に國際正義なるものは世界を主配する通觀念であつた、所が此の第二次世界戰爭に至つては、殆んど有ゆる國家が皆聯合國か樞軸國に加勢し、宣戰を布告せぬ國家は實に少ない、のみならず、世界の大覇王を以て任じた大英國は既に轉落して、米國の救助に依て存在する狀となつた、玆に世界歴史あつて以來の大變革は行はれなければならぬ、謂ゆる世界舊秩序は崩壞せられて、新秩序を建設するの外はないのである、而して國際公法の制裁が弱くなつて、國家至上觀念が強くなつて來たから、何れの國家か最も强力なる國家が世界を指導するのでなければ、平和が維持出來ぬかの如き觀すらある、喩えて云へば行司があつて相撲を取るのでなく、喧嘩で勝負を決めるやうな觀がある、故に今後は武力なき平和を果して求め得らるゝか否かすら疑へば疑はるゝ、こう考へて來ると、此の大東亞戰爭は中間で平和を求むることは出來ぬ、勝つて勝つて勝ち抜くの外はないものである、米國は一九四四年即ち昭和十九年末には、陸軍は兵力四百萬人、第一線飛行機二萬、海軍は二百六十萬トン、第一線飛行機一萬五千機を完成し、大攻勢に轉ずると豪語して居る、然れば此の大東亞戰爭は三年や五年で片付くとは思はれぬ、玆に於て總てを國家に捧げて最後の勝利を求むるのは理の當然である、此の意味に於て我が宝仙寺にあるものは眞言秘密修行に直接必要缺く事が出來ず、また代用品も得ることの出來ぬものを兩三點除きて、其の他の一切の金屬を皆擧げて國家に献納する所以である、

是れが宣戰の詔勅に

429
30

億兆一心國家ノ總力ヲ擧ゲテ征戰ノ目的ヲ達成スル道であると信ずるからである。

十四

梵鐘に別れることは私としては實に淋しい、そこで此の十月二十一日に特に梵鐘の撞き納め式を行ふのである、此の鐘は幾多の善男善女を慰めたのであらう、或は神降鐘として諸天善神の來臨を仰ぎ奉り、或は無常の鐘として涙を流さしめ、或は火事の急報、浸水の報知、有ゆる場合に生きて働いて居る、指折り數ふれば實に貞享四年から今年まで二百五十六年、其の間、或は人を喜ばしめ或は人を悲ましめた其の數は何千何萬或百萬邊かも知れぬ、此の魂あるものが愈々彈丸となるか飛行機となるか戰車となるか、其は知らぬが、庶幾くは此の魂を敵國降伏に生して貰いたいのである、夫は曾て第二回目に献納した天水桶が執念深く二度も私の目に觸れたやうに、

昭和十七年十月十八日印刷
昭和十七年十月廿一日發行
〔非賣品〕
東京市中野區宮前町五〇
編輯兼發行人　富田戮純
東京市本郷區湯島三組町八一
印刷人　川邊活版所

終